

令和 8 年産 仙南大豆情報(第2号)

令和 8 年10月20日 発行
宮城県大河原農業改良普及センター
TEL:0224-53-3496
Fax:0224-53-3138
E-mail:oknkt@pref.miyagi.lg.jp

8月以降の気象経過

8月:平均気温及び降水量は平年並みで、12～14日にまとまった雨が降りました。日照時間は平年の約70%で、平年より日照時間が短くなりました。

9月:平均気温は平年並み、降水量は平年の約130%となりました。

8月に引き続き日照時間が短く、平年の約60%となりました。

10月:15日時点で平均気温は平年並みで、降水量は平年の約2%となっています。日照時間は平年の約140%となっています。

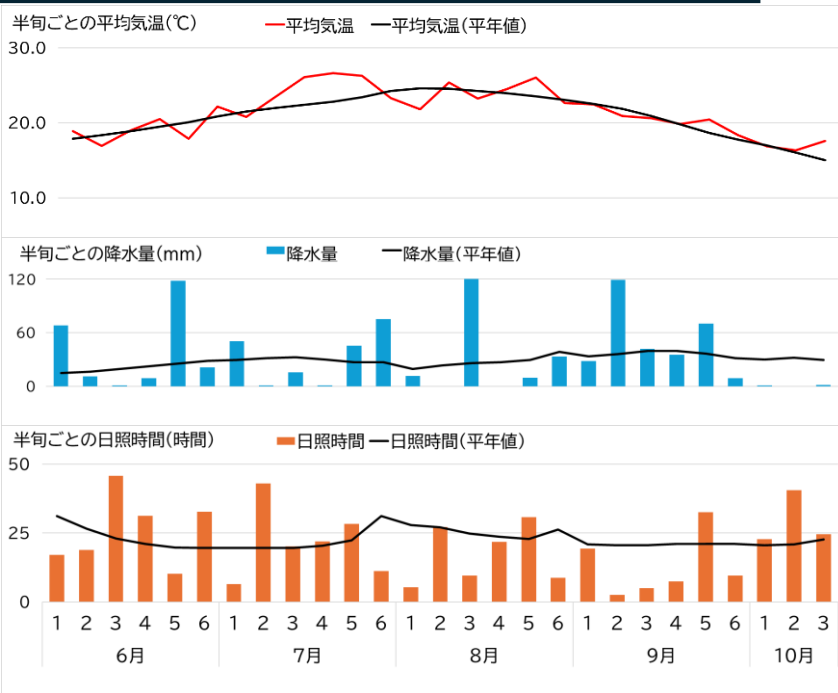


図1 気象経過(アメダス丸森 6/1～10/15)
(上:最高・最低気温 中:降水量 下:日照時間)

生育状況

多くのほ場では十分な生育量が確保されていましたが、播種直後の降雨により、生育不良となったほ場も見受けられました。生育調査ほでは、あやこがね・ミヤギシロメともに開花期（8月上旬）の日照時間が短かったことから、主茎長が平年を上回りました。10月中旬現在、あやこがねは落葉期に入っており、ミヤギシロメはほ場の大半で葉が黄化して落葉が始まっています。

表1 生育調査結果(9月2日調査)

品種	調査地点	区分	播種日	開花期	主茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
あやこがね	大河原町 金ヶ瀬	本年値	6/15	8/2	65.6	12.8	2.3
		前年差	2 日早い	同日	+10.1	-0.5	-0.8
		平年差	1 日早い	1日遅い	+20.0	+1.0	-0.6
ミヤギシロメ	大河原町 金ヶ瀬	本年値	6/20	8/10	82.1	13.8	3.6
		前年差	1 日早い	1 日遅い	-17.7	-2.2	+0.8
		平年差	4 日早い	同日	+6.8	-0.3	+0.8

※1 平年値:R3～R7の5か年平均。

※2 「-」は短い、少ない、「+」は長い、多いを示す。

1. 排水対策

降雨後、水が抜けにくいほ場では、コンバインが入れずに収穫適期を逃す恐れがあります。

ほ場を見回って排水溝や明渠の点検を行うとともに、枕地のうねを切って溝を作り、表面排水を促しましょう。

2. 雑草・青立ち株の抜き取り

収穫時の青立ち株や雑草の巻き込みは汚粒の原因になります。収穫前に抜き取り等を行いましょ。

(1) 雑草

大型雑草や果実を付ける雑草は全て抜き取りましょ。

帰化アサガオやアレチウリなどのつる性雑草は、抜き取りの際に大豆を傷める原因となるので注意が必要です。

(2) 青立ち株

① 葉や茎が緑色のままで莢数が極端に少ない

→生育不良が原因で、茎葉の水分低下は見込めないため、抜き取りを行いましょ。

② 茎だけが緑色で莢数は普通～多い

→可能な限り、茎水分の低下を待って刈り取りを行いましょ。



図2 雑草・青立ち株（左:タデ類 中:アレチウリ 右:青立ち株）

雑草の被害拡大防止について

難防除雑草の被害拡大を防ぐためにも以下の事項を徹底するようにしましょ。

(1) 収穫の順番は雑草の少ないほ場から

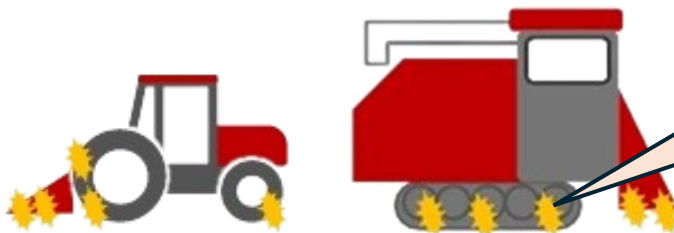
難防除雑草が多発しているほ場で機械作業を行うと、雑草の種子が機械に付着し、未発生ほ場に移動してしまう恐れがあります。

収穫の計画を立てる際には、雑草の発生程度を考慮して順番を決定するようにしましょ。

(2) 収穫後のコンバインの清掃の徹底

雑草の種子は作業後のタイヤや刈り取り部に、土と一緒に付着しています。

収穫作業後は、その日のうちに機械をよく洗って付着した種子を洗い流すようにしましょ。



作業後のタイヤや刈り取り部に
雑草の種子が付着しています

図3 作業機への種子の付着イメージ(みやぎの大豆・麦類技術指導指針から)

3. 収穫

収穫適期の目安は、完全落葉後25日～35日とされていますが、茎・莢の色や莢内での子実の振動音、茎の切断音など総合的な判断が必要になるので、ほ場全体を見て生育ステージを判断してください。

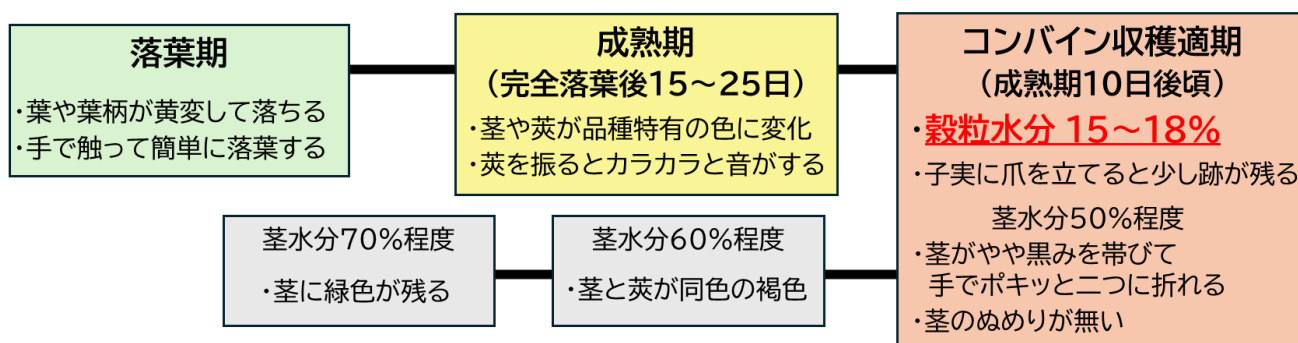


図4 収穫適期の判断フロー（みやぎの大豆・麦類技術指導指針から）

表2 生育調査ほにおける成熟期

品種	成熟期(平年値)
あやこがね	10/23
ミヤギシロメ	11/7

※生育調査ほ:大河原金ヶ瀬

※平年値:R3～R7 の5か年平均

☆収穫時チェックリスト

以下の項目に注意して収穫を行いましょう

- ☐ 収穫前にコンバインの清掃・整備をしておく
- ☐ 前日・当日に降雨がない日に収穫する
- ☐ 11時～16時の間に収穫を行う
- ☐ 刈取高を10cm以上に調整する
- ☐ 土を巻き込んだら、速やかに停止して土や莢を除去して清掃する

4. 紫斑病対策

紫斑病は、成熟期の平均気温が $18\pm3^{\circ}\text{C}$ で、降雨が多いと多発する傾向にあります。特に、莢が黄化してから湿った状態が続くと紫斑病の発生が助長されやすくなります。また、収穫適期を過ぎたり、収穫後の乾燥が遅れたりしても発病は助長されます。適期収穫と、収穫後の速やかな乾燥に努めてください。

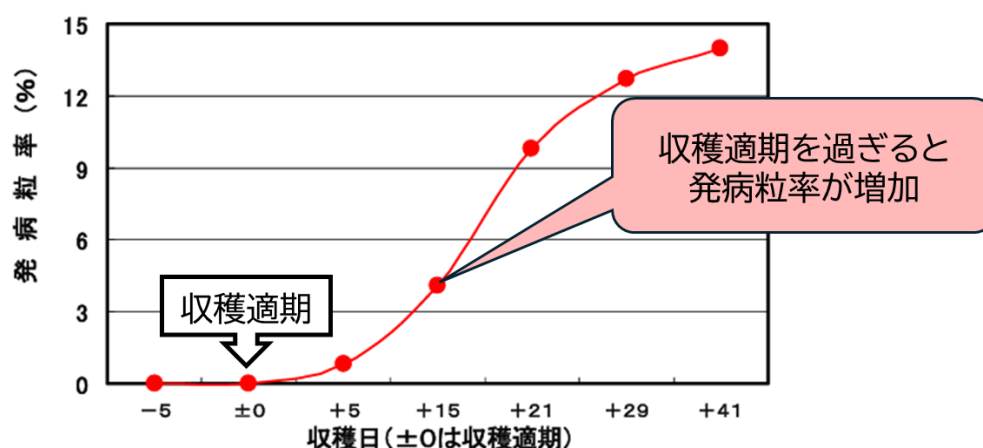


図5 紫斑粒発生に及ぼす収穫時期の影響（みやぎの大豆・麦類技術指導指針から）

5. 乾燥調製

大豆は子実表面の水分が下がりやすく、子実中心部から表面には水分が移動しにくい性質があります。子実の表面と内部の水分の差が被害粒の原因であり、**急激な乾燥は、裂皮粒やしわ粒の発生**につながるため、以下のポイントを参考に、適切な乾燥を行ってください。

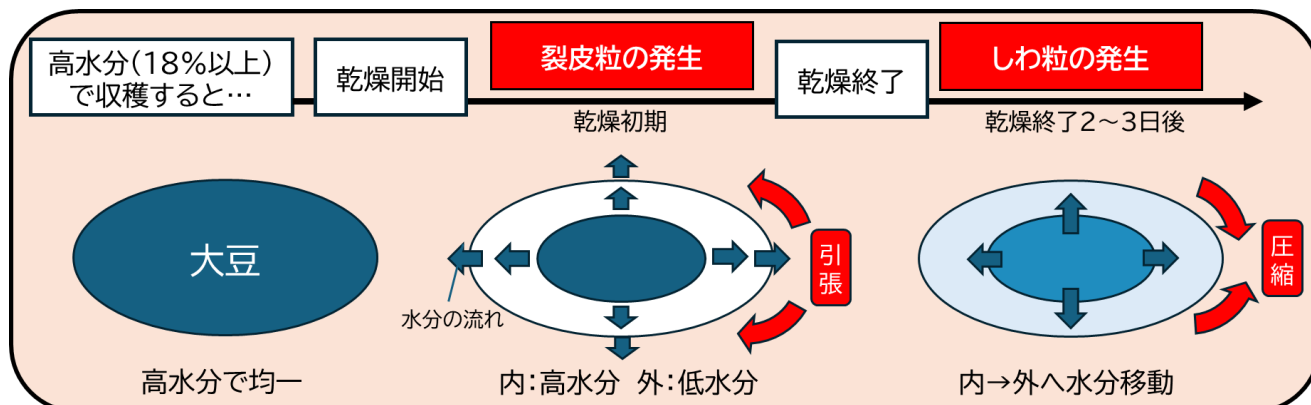


図6 大豆乾燥における被害粒発生の仕組み（みやぎの大豆・麦類技術指導指針から）

乾燥時のポイント

- ① 子実水分のばらつきが大きい場合があるため、こまめに水分測定を行う
- ② 子実水分が **18%以上の場合**は常温で通風し、18%以下になってから加温する
- ③ 加温乾燥では、**送風温度を30℃以下**に設定する

6. 次作に向けて

(1) 収穫した大豆の確認

被害粒がないか確認し、被害粒が多い場合は、次作の病害虫防除を徹底するようにしましょう。可能であれば、次作で優先的に防除作業が行えるよう、ほ場と収穫物を確認してください。

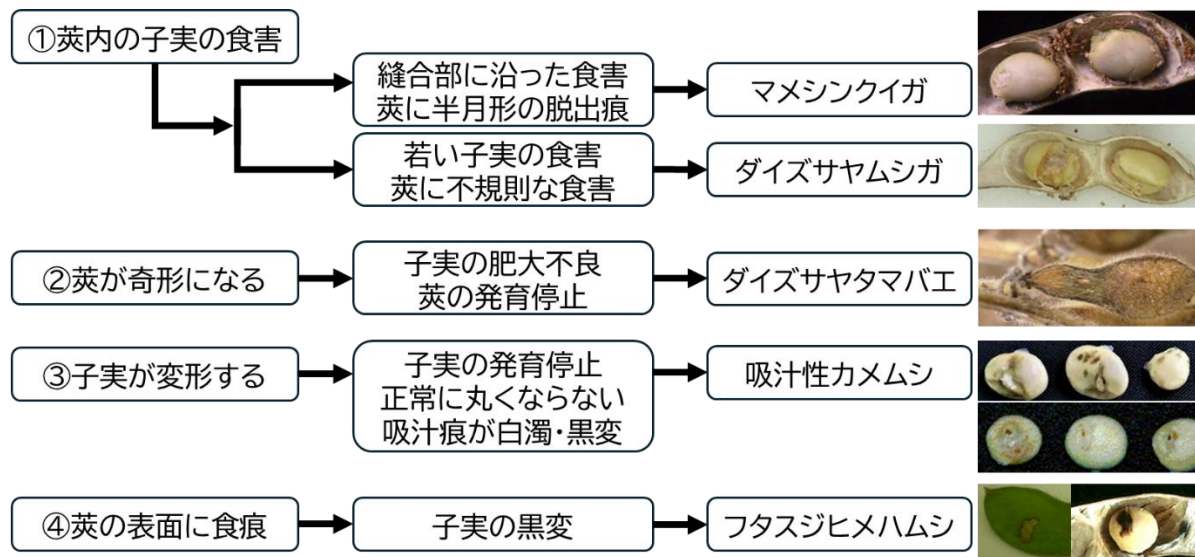


図7 莢や子実を加害する主要害虫と被害の様子（みやぎの大豆・麦類技術指導指針から）

(2) 雑草・害虫の発生が多かったほ場の記録

発生が多かったほ場や、発生種を記録することで、適切な農薬や防除資材の早期準備につながります。作業員への情報共有や、次作の作付計画の判断材料にするためにも、記録をつけるようにしましょう。